

二世豊竹古、靱大夫床年譜 (十三)

轉載不許

年

次

劇場並に狂言

古靱大夫に關する記事

淨瑠璃界一般

大正十年

五月十五月初日

(二十三日間)

前 伽羅先代萩 文樂座
中 義士銘々傳 御殿之段迄
切 觀音靈驗記 百姓彌作鎌腹之段
志賀の里より
御禮参りの段迄

六月十五月初日
(二十日間)

前 生寫朝顔話 同座
中 艶容女舞衣 大序より
櫻鈴恨鼓鞘 酒屋之段
切 關取千兩幟 鰻谷之段
猪名川内之段より
相撲場之段迄

七月九月初日
(十六日間)

東京 有樂座

役場 (初役)二月堂良辨杉之段
三味線 三世鶴澤清六
文樂座に於て壺坂寺之段は故三世大
隅大夫入座の時、その出したものとな
りしより後度々上演されたるも良辨
杉之段が上演されたるは此度が始め
にて大好評なりき。

役場

(三度目)濱松之段
三味線 三世鶴澤清六
(初役)猪名川内之段
三味線 猪名川

古靱大夫病氣にて四日間休演、濱松
之段は町大夫、猪名川内之段は八十
大夫夫々代役。

一座
古靱大夫、清六、鰻大夫、靜大夫、
鳥大夫、つばめ大夫、越名大夫、芳辰
大夫、淺造、小綱、清一、清丸、
(人形) 玉次郎、玉三、文五郎、榮三
辰五郎、玉七、外全都

役場
第一回 二月堂良辨杉之段
第二回 御所様三之切
第三回 合邦辻下之巻

是にて夏休。

年次

劇場並に狂言

古軼大夫に關する記事

淨瑠璃界一般

九月一日初日
(二十五日間)

前 文 樂 座
双蝶々曲輪日記 大序より
橋本迄

中 玉澤前旭秋 右大臣道春館之段

次 傾城阿波の鳴戸 十郎兵衛住家
之段

切 うつば猿

十月二日初日
(二十二日間)

前 八陣守護城 大序より
ハツ目之段迄

中 東海道四谷怪談 伊右衛門住家
之段

切 心中天網島 河庄之段より
網島之段迄

十月三十日初日
(二十五日間)

前 本朝廿四孝 大序より
狐火之段迄

切 境浦兜軍記 琴實之段

神戶 日本劇場
(是楠公社前也)

名古屋 末廣座
(元の大座也)

和歌山 辨天座

十二月廿日初日
(五日間)

十二月廿日初日
(五日間)

役場 (二度目) 引窓之段切
三味線 三世鶴澤清六

九月十三日、二世魯澤龍助(本名石田福松)歿す、法名讚譽龍天禪定門行年七十。

役場 (初役) 河庄之段切
廿一、廿二日病氣の爲め休演、鑑大夫
代役。

役場 (二度目) 桔梗ヶ原之段奥
三味線 三世鶴澤清六

十二月廿二日九世豊竹若大夫伴野澤吉勝(本名三木久太郎)歿す、法名吉然、勝信士、行年五十三。
是にて冬休。

一座
伊達大夫、吉三郎、靜大夫、芳之助
島大夫、淺造、常子大夫、八、鏡
清二、清丸、雀大夫、千鳥大夫、
(人形) 文三、文五郎、玉次郎、玉
七、紋三、外大勢

一座
古軼大夫、清六、駒大夫、靜大夫、
島大夫、常子大夫、辰大夫、富榮大
夫、千鳥大夫、鶴糸、芳之助、淺造
八造、清二、文五郎、紋三、琴糸外敷名
(人形)

大正十一年(四十歳)
一月二日初日
(三十日間)

前 里見八犬傳 文 座
名筆吃又平 芳流閣之段迄
和田合戦女舞鶴 市若丸初陣之段
戀飛脚大和往來 新口村之段
増補 忠臣蔵 本藏下屋敷より
迄 兩國橋勢揃之段

前 一谷嫩軍記 同 座
紙子仕立兩面鑑 清水阪之段より
段迄 大文字屋之段
次 戀女房染分手綱 重六之段より
段迄 重六の井子別れ
切 卅三間堂棟由來 平太郎住家之
段迄 段より仇討之

二月十一日初日
(二十二日間)

豊竹古靱大夫一座
岐阜 旭 座
長野 相生 座
上田 中村 座

役場 (初段)本藏下屋敷之段切
三味線 三世鶴澤清六
本興行より古靱大夫に退出しつゝ
三世鶴澤清六、九日より風邪氣味に
て休演せしが、これが元にて一月十
九日午前五時歿す。本名田中福太郎
五。清六の代役は芳之助勤む。行年五十

役場 (三度目)駒林村住家之段切
十五日より風邪の爲め途中よりつば
め大夫代役を勤む。つばめ大夫この
時十九歳にて好評

竹本越路大夫 病氣全快にて出勤す
一月三日 七世野澤喜八郎、京都門
前町宅にて歿す。法名顯實院光日
喜信士にて行年七十五。三世庄次郎門
人にて四世庄次郎を襲名。後に七世門
喜八郎を相續す。

古靱大夫の合三味線は二世豊澤新左
衛門と決定、稽古の爲め文樂座新左
興行打上げ後、地方巡業に出ず。二月

寒胃流行の爲め鶴澤友次郎、竹本伊
達大夫、竹本津大夫等も休演、津大夫
の役場陣屋は中途より駒大夫、同三
味線友次郎は初めより叶、伊達大夫
の役場柳は初より靜大夫夫々代役す

三月七日五世鶴澤才治(本名日高大
三郎)歿す。法名善行院宗遊信士、初
年五十二。四世才治の門人にして初
め才吉と名乗り後大三郎を経て師名
五世名跡を相續す。

三月十三日初日
(四日間)
三月十八日初日
(三日間)
三月廿二日初日
(三日間)

古靱大夫、新左衛門、鑑大夫、團六
島大夫、淺造、つばめ大夫、清二郎
辰大夫、新三郎、千島大夫、彌太郎
郡信三郎

年次

劇場並に狂言

古軼大夫に關する記事

淨瑠璃界一瞥

三月廿六日初日
(四日間)

三月三十日初日
(三日間)

四月二日初日
(二日間)

四月五日初日
(三日間)

四月十八日初日
(二十三日間)

五月二十日初日
(十六日間)

新潟 大鶴座

長岡 長盛座

越後三條町 三條座

富山 大正座

文樂座

前 著太平記白石噺

敵討襷襦錦 大晏寺堤之段

艶容女舞衣 酒屋之段

義経腰越狀 和泉三郎館之段

辰鴛色相肩 廓嘶之段

前 彦山權現督助劍

中 日吉丸稚櫻 小牧山城中之段

切 迎駕野中の井戸 桑樂町之段

新潟市西堀通り寺町不動院に六世豊竹島大夫の墓あり、墓碑破損せし爲一行中の七世島大夫、之れが築を發起し、一座中及び同市駒屋彌吉、大島座々主大勝氏と共に改修す。六月十六日、同市に於て歿す、法名釋善念、行年四十九。
本樂座は盆替り迄の豫定なりしも、文樂座三月興行「菅原傳授手習鑑」寺復病氣の爲め休演、源大夫役となりし爲め古軼大夫一座を呼戻すべき白井松竹社長の命令を携へ吉野主任新渴迄迎ひに赴きしも、後三ヶ所の契約成立後なりしかば、之れを終りて歸阪することとなれり。

役場 (初役)和泉三郎館之段切

二世豊澤新左衛門 古軼大夫合三味線として初めて出座

役場 (初役)瓢箪棚之段切

三味線 二世豊澤新左衛門 ツレ 竹澤團六

三月廿三日、五世竹本播磨大夫(本名小林重三郎)歿す。同人は京都昌光院で松屋助師の門人、初め仙之助、後播磨大夫を襲名。東京に移住後、五世播磨大夫を襲名。

竹本越路大夫病氣の爲め休演。四月廿四日午後九時、竹本南部大夫自宅にて園基中歿す。本名南部卯之助、法名越真院得譽、無所南部居士。行年五十八。當代の美音家なりき。南部大夫の役場は竹本叶大夫代役。

本興行より越路大夫出勤の豫定にて役場「堀川」と決り、既に希附も作成せしも立格古の日、又復病氣再發「堀川」を削除、十九日初日を一日延期して廿日より開場す。物叶大夫本興行に於て初めて追出し附物を語る。